

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 9 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02774

研究課題名(和文) ゴンザ・タタリノフ・レザノフのロシア資料について集大成のための文献学的研究

研究課題名(英文) A Bibliographical Study of Russian Materials Written by Gonza, Tatarinov and Rezanov

研究代表者

江口 泰生 (EGUCHI, Yasuo)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：60203626

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はロシア資料の全体像を明らかにし、情報を共有し、資料を公表するために、江口泰生、駒走昭二、久保園愛が協力して資料公表の準備を進めることにあった。おおよそ3つの方面から着手した。(1)資料の翻字・解読・注釈・翻訳、(2)日本の出版社との交渉、(3)サンクトペテルブルク東洋写本研究所との交渉

その成果について、ゴンザ『世界図絵』やタタリノフ『レキシコン』の解読は進んだが、詳細に観察するとまだまだ未解決な部分がある。日本の出版社は協力的であった。東洋写本研究所との交渉は『レキシコン』画像データの料金提示まで漕ぎつけたが、その後、コロナ禍などもあり中断しているが、今後も粘り強く交渉していきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ロシア資料は江戸時代に薩摩方言、仙台方言、下北方言を反映する外国資料である。江戸時代に運悪く遭難した人々がロシアへ漂流し、その地でキリル文字を使って日本語の辞書や文法書などを書いたものである。漂流民は庶民層だったので、江戸時代の方が色濃く反映している。良く知られているキリシタン資料と比較して、非常に忠実に方言を反映しているために、明治大正以降、外来語が流入してくるより前の方言を知ることができる。この資料を解読し、翻字し、公表することは研究者の責務だと考える。そのために資料を解読し注釈し、その成果を経て、少しずつではあるが進展し、その成果を公表してきている。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to clarify the whole documents of the Russian materials, to share the information, and to publish the materials. Yasuo Eguchi (Okayama University), Shoji Komadori (Kanagawa University), and Ai Kubozono (Aichi Prefectural University) worked together to prepare the materials for publication. We started with the following three points. (1) Transliteration, deciphering, annotation, and translation of the materials. (2) Negotiations with Japanese publishers (3) Negotiations with the St. Petersburg Institute of Oriental Manuscripts. As for the results of our work, we have made progress in deciphering Gonza's "Orbis sensualium pictus" and Tatarinov's "Lexicon," but there are still unresolved issues when we observe them in detail. Japanese publishers have been cooperative. Negotiations with the Oriental Manuscript Research Institute went as far as offering a fee for the image data of the Lexicon, but then stalled.

研究分野：国語学

キーワード：ロシア資料 ゴンザ レザノフ タタリノフ 方言 音韻 語彙 文法

1. 研究開始当初の背景

ロシア資料は江戸時代の漂流民、具体的にはゴンザ、タタリノフ(日本名「三八」)、善六がロシアの地などで遺した資料である。辞書、会話書、百科事典、文法書などがあり、江戸期の方言(鹿児島、下北、仙台)を知る貴重な資料である。外国資料としてはキリシタン資料・朝鮮資料・中国資料などが知られているが、ロシア資料という別の資料群があるのである。

2. 研究の目的

これらは鹿児島県立図書館マイクロフィルム、宮城県図書館、有精堂マイクロフィルム、ペトロワ著書『レクシコン』、村山七郎1965年『漂流民の言語』(吉川弘文館)などで日本においても見ることは可能であるが、慣れない文字がなかなか読みづらく、利用しにくいという支障があった。

そこで、本研究はロシア資料を解読し、解読上の問題点を示し、全体像を示し、情報を共有し、資料を公表したいと考えた。

一人で進めるのは大変な作業量になるので、江口泰生(岡山大学)、駒走昭二(神奈川大学)、久保園愛(愛知県立大学)が協力して資料公表の準備を進めることにした。

日本語部分だけでなく、ロシア語部分にも翻字、解読、注釈などを施して、誰もが見やすいようにできれば、と考えたのが研究の目的である。

おおよそ以下の3つの方面から着手した。

(ア) 資料の翻字・解読・注釈・翻訳

(イ) 日本の出版社との交渉

(ウ) サンクトペテルブルク東洋写本研究所との交渉

3. 研究の方法

2017年に江口が「ロシア資料叢書」という企画を提案し、元東京大学教授米重文樹氏の直接に助言を受け、おおよその方針、計画をたてた。

江口はタタリノフ資料、江口・駒走・久保園はゴンザ資料のうち、『友好会話手本集』を中心に翻字・解読を進めることとした。江口が作成した電子データを共有し、それに新しいデータを書き込むことで作業の進展を図った。『世界図絵』については江口・駒走で作成したデータを原典の体裁を反映する書式に書き換えることにした。

2018年には某出版社に計画を持ち込んで、協力を得る約束をとりつけた。

またサンクトペテルブルク東洋写本研究所との交渉によって『レクシコン』電子画像の料金交渉を行った。江口はかつて作成した『世界図絵』をワードファイル形式に置換した。その後、サンクトペテルブルク東洋写本研究所との交渉は研究所からの『レクシコン』画像データの料金提示を受け、それを了承したものの、その後、紆余曲折があってスムーズに進まなくなった。解読文の冒頭に研究所長や研究員の論文を掲載したいと思ったのだが、それが意向を損ねたのかもしれないと思う。

機会を見てもう一度研究所を訪問し、交渉しようとしたが、2020年になるとコロナ禍が生じて中断することになってしまった。

日本の出版社の担当者が転出するということがあった。

それでも江口は下北方言を反映するタタリノフ資料の解読を継続的に進め、駒走・久保園はこつこつと注釈活動をすすめた。

4. 研究成果

江口は注釈作業の行程において、ゴンザ資料に反映する一拍語が長音相当の形態交替を生じること、タタリノフ『レクシコン』においては周辺語彙に長音があること、などから、古代において長音が単音節で周辺語彙に存在したのではないかと考え、2017年7月22日に岡山大学言語国語国文学会(文学部会議室)「8世紀奈良時代日本語の長母音」を口頭発表し、以下の論文にまとめた。

2018年3月「古代日本語の長母音」『国語と国文学』平成30年4月号 pp.50~pp.68
<https://www.fujisan.co.jp/product/868/b/1636664/>

奈良時代の長母音表記は「単音節で周辺語彙」という共通性を持ち、一定量を有している。このような特徴はタタリノフ資料の特徴とゴンザ資料の特徴を重ねたものに等しいことを指摘し、古代には長母音は音韻的に存在したものと思う。ただしそれは現代日本語の長母音とは違う機能を有していた。単音節語で、かつ周辺の語彙にのみ出現し、語種の区別に関与する周辺の音韻として存在したと思われるということをも明らかにしたものである。この機能を「語種分別」と称した。この論文は日本語学会『日本語の研究』展望号にも取り上げられた。

上代には長音は存在しないというのが通説であったが、今後、見直しが行われると考えている。上代語には長音を想定しないと解決できない現象が他にもいくつかある。

2017年8月9日にはTASC研究助成報告会にて「江戸時代ロシア漂流民の記録にみる嗜好品文化の研究」(霞ヶ関東海大学オフィス)を発表した。江口、駒走、久保園3人で申請したものである。本科研課題とは異なるテーマ(酒、たばこなど)を対象としたものであるが、その際、洋学資料としてのロシア学資料を調査できたのは大変に有意義であった。漂流民が帰還すると、調査書や語彙集などが作成され、それを元に新たに語彙集などが作成され、さらに増補、改変さ

れて発展していくことがよく分かった。その成果は次に掲載してある。リンクとともに示しておく。『平成 28 年度 公益財団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告』(公益財団法人たばこ総合研究センターTASC) pp.104~135

https://www.tasc.or.jp/assist/archives/h28/pdf/2016_05B_eguchi.pdf

また 2018 年 10 月『日本語学大辞典』(日本語学会、東京堂出版)「露語資料」項目を執筆する機会を得た。短期間での執筆だったが、明治書院『国語学研究事典』などではロシア関係は全部をひっくるめて説明してあるのだが、これまでの研究蓄積と上述の洋学資料としてのロシア学資料を調査した結果をもとに、外国資料としての「ロシア資料」と洋学資料としての「ロシア学資料」を区別しなければならないのではないかと思いいたることになる、良い機会であった。

前者「ロシア資料」の成立は次のようである。18 世紀初頭、ピョートル大帝の命により日本人漂流民が保護されるようになった。ゴンザ、二世タタリノフ(日本名「三八」)、通訳善六などで、彼らの言葉を記録した文献が生まれた。

後者「ロシア学資料」の成立は次のようである。時代が下ると、通商上、漂流民を帰国させることも行われるようになった。伊勢の大黒屋光太夫、仙台の津太夫などである。またロシア人ゴロヴニンが捕捉された。彼らがもたらした情報や書物が元となり新たな学問が起こった。

前者で資料的価値が高いのは、(ア)薩摩漂流民ゴンザ関係資料、(イ)アンドレイ・タタリノフ関係資料、(ウ)ニコライ・レザノフ関係資料などである。これらはロシア人の立場から日本語を観察し、キリル文字などで日本語を表記していて、語形・清濁・母音融合・無声化・有声化などが詳細にわかる。また 18・19 世紀の鹿児島方言・青森南部方言・仙台石巻方言などを反映しており、明治以降のメディアの影響を受けていない方言資料としても有力である。そこでこれらをキリシタン資料・朝鮮資料・中国資料などの外国資料の一環とみなし、「ロシア資料」とよぶ。

後者は本邦におけるロシア研究に関するもので、洋学の一部、蘭学などと並ぶ分野である。「ロシア学資料」と称されている。主要なものを挙げると、(1)伊勢の大黒屋光太夫と磯吉関係、(2)仙台の津太夫関係、(3)捕縛されたゴロヴニン関係、(4)安芸の久蔵関係、(5)尾張の重吉関係、(6)薩摩永寿丸関係、(7)越中長者丸関係、(8)幕末プチャーチン来航時のロシア人関係資料などがある。

ロシア学資料にはロシア俗語や方言、習俗、文化が掲載されており、ロシア語史や日露交渉史、本邦でのロシア語教育史などの点で大変興味深い。日本語部分は漢字・カタカナ表記なので具体的音声は分からないが、ロシア語を工夫してカタカナ表記したり、日本語に対応するロシア語が掲載されたり、日本語の口語で表現されるものもあり、日本語研究に利用できると思うが、研究はあまり行われていない。今後、この方面でも研究もおこなわれることを期待するが、その礎になるのではないかと思う。

またロシア学資料を調査するうちに、「タタリノフ(サンパチ)が大酒を飲んで死んだ」という記述を見つけ、死亡年を確定することが出来たのも収穫である。

江口は下北方言を反映するタタリノフ資料の解読を継続的に進めて一部を次のように公表した。参照リンク先も示しておく。

2019 年 12 月 A .タタリノフ『レクシコン』注釈 9(~)『岡山大学文学部紀要』72、pp.29~37、

[http://ousar.lib.okayama-](http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/58253/20200415104743559727/jfl_072_029_037.pdf)

[u.ac.jp/files/public/5/58253/20200415104743559727/jfl_072_029_037.pdf](http://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/58253/20200415104743559727/jfl_072_029_037.pdf)

『レクシコン』を解読していて気付いたことであるが、クに相当する部分に (=ku、クと写す)や (=k、ク と写す)と表記する場合と、 (=kwu、クウと写す)で表記する場合の 3 種類がある。

この 3 種類のクの出現とよく似た現象は島根方言にもみられる。木部暢子編 2016『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 出雲方言調査報告書』(国立国語研究所)の基礎語彙集によれば、クには[kw] [k u][k u]が出現する。『レクシコン』方言、島根方言などを比較対照してみると、クが破裂の後に唇での摩擦を伴った時期が古くあったように思われる。そしてそれはクイとなる場合や、クのあとに無声音+狭母音 i が後接する場合に[k u]になることが多い。

こうした発音が古い日本語にあった可能性がある。古代日本語のクにこのように破裂の後に摩擦を伴うような異音があったのではなかろうかと考えると、紀貫之が「かいぞく(海賊)むくぬせむ」とイとウを間違えて書いたことや「報い」の場合にイをウに誤る例が多いことがわかるように思われる。クイがあたかも合拗音のようになったのではないかと考えた。イとウの混同の用例は「むくぬ(報)」が非常に早く出現し、これが当時の音韻を反映するものなのか、語彙的な現象なのか、で意見が分かれているが、それには語彙的理由があるのではないかということである。

さらにゴンザ資料に出現する 2 種類のエ列音の書き分けから、2019 年 6 月 29 日(土)に九州大学国語国文学会特別講演「ロシア資料と日本語音韻」(九州大学伊都キャンパス イースト 2 号館 D-105 教室)を行い、この一部を次にまとめた。2021 年 3 月「ロシア資料と上代特殊仮名遣エ列音 - 下二段動詞の場合 - 」(『筑紫語学論叢』風間書房、pp.136-162)。

これは江口泰生 2001 「ロシア資料の工列音」『筑紫語学論叢』(風間書房)で明らかにした工列音の2種の書き分けが、現代語工列拗音と上代特殊仮名遣い工列を合算したような分布をすることから、上代語工列の区別が口蓋化の有無の対立(拗音対直音)に即したものと捉えられること、同時にゴンザ資料の工列音の分布が実在したことを保証するのではないかと述べて、これらを利用し、上代のエ乙 - ア交替による下二段と四段と対立・生成について論じたものである。

ゴンザ資料の語形を翻字する際に工列をどのように表現するかは従来からの課題であった。前に一度、駒走氏と相談したとき、彼は「必要ではないか」と主張したが、私は「区別が混乱しているところもあるので、カタカナで書き分けるのは難しいから不要ではないか」と申し述べた。なかなか難しいところであるが、少し議論を進展することができたと思う。

さらに上代のエ乙 - ア交替が下二段と四段の係に類似するという指摘はこれまでもあったが、具体的な資料に即して現実的に描いてみせたという点、ゴンザ資料に対応するような工列の区別がある点、今後の動詞研究にいささかなりともインパクトを与えられたらと考えている。

2020年になるとコロナ禍のために支障をきたすようになり、研究期間の延長申請をおこなった。往来ができなくなったこと、学会などの参加できなくなったこと、リモート授業の準備のため、機器やソフトの習得に膨大な時間が必要となったこと、研究の総まとめを行う余裕がなくなったこと、からである。

その中で、タタリノフ資料の特殊拍が中央語のそれとは異なる分布をすることから次の論文を公表した。2020年3月「タタリノフ『レクシコン』の特殊拍(『坂口至教授退職記念 日本語論集』創想社)。

これは『レクシコン』中の特殊拍を考察したものである。その結果、単独母音は消失しない。長音は語彙的に消失する。促音・撥音は語彙的にOKとなると、音条件で後続音に吸収されて消失するという記述を行った。

次に、まず特殊拍を保存するか、消失するかという選択肢がある。次に消失する場合、語彙条件のみで消失する場合と、語彙条件でOKになった場合に音条件が働くという場合がある。

第一条件の語彙条件には二つの方向がある。一つは消失を推進させる条件である。促音・撥音・長音の消失は和語的であるかどうかという語彙的な条件によっている。漢語であっても馴染んでくれば特殊拍を削り、和語のような構造にするということである。もう一つは形態音韻的、形態的な条件であり、消失阻止の条件として働く。二重母音・促音は動詞の音便に組み込まれているかどうか、指示詞体系に組み込まれているかによって保存の方向へ働く。

こうした考察を経て、タタリノフ『レクシコン』の語形の認定に精度を増すことになったと思う。またこの分析には語種上の、形態上の階層性を想定しているが、これは他の言語現象にも応用可能であるし、これまでも内々実践してきたものでもある。

またリモートの方法もすこし習得して、2021年1月9日(土)に九州方言研究会「東国文献の開音・合音・ウ段音」を公表し、次の論文としてまとめた。2021年6月「東国文献の開音・合音・ウ段音」(『語文研究』130・131合併号、本報告書執筆時には未入手)。

方言の場合、開合の合流はそれほど簡単ではなかった。越後のようにっとおで発音しわけた方言もあった。九州や大鳥方言のように合音がウ段と合流した方言もあった。ウ段がイ段に逃げる方言もあった。ウ段の一部(特にサ行拗短音)はオ段に逃げる方言もあった。

この事はタタリノフ資料やレザノフ資料の語形を同定する際に必要になってくる。たとえばタタリノフ資料では化粧を「ケシュ」とする。

しかしそれよりも大きな収穫としては、言語研究には共時的な音韻体系の研究も大切であるが、開音が合音へ接近し、そしてそれが引き起こした音韻のダイナミックな変化や交替、他行への波及などといった点にこそ言葉の本質が浮かび上がり、方言研究の意義が認められるのではないかと分かった点である。こういう場合に全体を一つの原理や法則で説明しようとする、無理が生ずる。たとえば共時的な母音体系から説明するなどである。そこで、言語変化を段階的に想定して通時的に説明すると、ダイナミックに、うまく説明できる場合があるということが分かったことである。内的再建法を具体的な方言実態に即するようにアレンジしたのであるが、これがうまくいったのではないかと考えている。

またサ行の問題点については古くから解決できない漢字音の問題点があったのだが、この論文が用いた方法、すなわち機能負担(量)に似た語彙量的観点から分析することによって糸口が見えたのではないかと考えている。

駒走昭二にはこの科研の直接的な成果ではないが、次がある。2017年10月ゴンザ資料におけるカス型動詞(『日本語の研究』13-4、pp.35-50)

リンク先 https://doi.org/10.20666/nihongonokenkyu.13.4_35

また長年の研究を集大成し、2018年10月『ゴンザ資料の日本語学的研究』(和泉書院、314頁)にまとめた。

さらに2020年3月「レザノフ資料と方言史研究」『人文研究』200、75-101頁、神奈川大学人文学会)によってレザノフ資料研究へ展開した。レザノフ資料の情報源となった善六のことを精査し、その言語特徴について論じたものである。善六は仙台方言だけでなく、ロシアで出会った新蔵たちの言葉の影響を受けたとしている。十分に想定されることではある。レザノフ資料の言語を当時の仙台方言そのままと考えて統計的な処理を行う立場もあるので、それへの反論と

しても重要な指摘であった。

ロシア資料全体を眺めた時に一人、個人の言語を反映した資料もあれば(ゴンザ資料、タタリノフ資料)一人が別の方言圏の人物の影響を受けていて、結果的に複層的な言語状況を反映する資料もあるということになる(レザノフ資料)。

他に関連する業績として次のようなものもあった。2018年2月『日本近世生活絵引 南九州編』、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2020年3月『日本近世生活絵引 琉球人行列と江戸編』、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2020年3月「漂流民ゴンザと日本語学:ゴンザ資料の日本語学的研究」(『ユーラシア研究』61、52-54、ユーラシア研究所)

資料を精査する研究のほかには江口が作成した『友好会話手本集』草稿本のデータを共有し、他の写本との校合作業も進めた。

久保園愛には以下の論文があった。

「ロシア資料の上付文字についての覚書」『愛知県立大学日本文化学部論集』8(pp.89-105)

「駒走昭二著『ゴンザ資料の日本語学的研究』『日本語の研究』16-1, pp.85-92

https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongonokenkyu/16/1/16_85/_pdf/-char/ja

これは前掲の駒走2018著書への書評論文である。ロシア資料研究の現在の到達点、問題点などが示されている。

「ロシア資料における格助詞 の機能」(九州大学国語国文学会、九州大学伊都キャンパス、2019年6月29日)を口頭発表ののち、「鹿児島方言における対格標示の条件」『筑紫語学論叢』(風間書房)に活字化した。ヲを標示するかどうかは、有生性・隣接性が関与しているということを示したのだが、その方法において、現代方言からの考察も加えているところが重要である。

江口・駒走の一連の研究ではゴンザ資料を分析して、そこから結論を導くという段階であったが、久保園はさらに現代鹿児島諸方言の分析も加えて、ゴンザ資料のデータすら盲信することなく、より精度の高い記述・分析を行おうとしている。

また次のような口頭発表があった。

「ロシア漂流民達の日本語を反映する『欽定全世界言語比較辞典』とその改訂版『アルファベット順全言語および方言比較辞典』の資料性の検討」(国語学叢史研究会、神戸女子大学三宮キャンパス、2019年9月28日)

ロシアで作成された世界中の言語を比較した辞典『欽定全世界言語比較辞典』を考察したものである。多種の資料が混在しているので、前掲の江口「露学資料」では記述を省略したが、こういうものも対象としていく必要があるかもしれないということである。またさらに今後、コロナ禍がおさまり、グローバル化によって往来が自由になれば、サンクトペテルブルグ以外でも資料の発掘がありうるのではないかと思う。

さらに2021年5月日本語学会シンポジウム「方言と中央語の対照 共通点と相違点」でパネリストとして発表した。ゴンザ資料を取り上げ、中央語との共通点や相違点、方言との共通点や相違点などについて発表した。準体ト、助詞ノ・ガなどの分布から、共通語そのものの歴史、方言そのものの歴史、共通語が伝搬して方言に与えた歴史など、多層的な考察をおこなった。

この発表の一部は「鹿児島方言における格助詞ガ・ノの分布 - 近現代の談話とロシア資料を対象に - 」『語文研究』130・131合併号、pp.1~17)で活字化した。

前述したようにゴンザ資料だけではなく、現代鹿児島諸方言の調査も踏まえて、より精度の高い研究を目指している。

本課題においては、出版社担当の転出、交渉の不具合、コロナ禍など、予期しないことが多々あった。くじけることはなかったので、ロシアとの交渉は粘り強く、諦めずに続けていきたいと考えている。タタリノフ『レクシコン』注釈も会話部分を残すところまで公表できた。今後も公表していく予定である。ゴンザ『世界図絵』は公表可能な段階にまで到達した。

3人がそれぞれの立場で注釈をすすめて、研究をすすめていったせいで、それぞれに刺激を受けて、きわめて有意義であった。

その一方で、2種類のエの表記をどうするか、クの表記をどうするか、ヲが表記されていないのか、融合して見えないだけなのか、『欽定全世界言語比較辞典』とその改訂版『アルファベット順全言語および方言比較辞典』などはどうするか、などの問題点も新たに浮かび上がってきたが、これらは次の段階への進展と考えて良いと思う。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

| | |
|---------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 226 |
| 2. 論文標題 近代語研究雑感 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 (『語学・文学』226) | 6. 最初と最後の頁 101-104 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 72 |
| 2. 論文標題 A. タタリノフ『レクシコン』注釈9 (~) | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 『岡山大学文学部紀要』72 | 6. 最初と最後の頁 29-37 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|----------------------|
| 1. 著者名 駒走昭二 | 4. 巻 200 |
| 2. 論文標題 レザノフ資料と方言史研究 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『人文研究』200 | 6. 最初と最後の頁 75-101 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 久保園愛 | 4. 巻 16-1 |
| 2. 論文標題 「駒走昭二著『ゴンザ資料の日本語学的研究』 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『日本語の研究』 | 6. 最初と最後の頁 85-92 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20666/nihongonokenkyu.16.1_85 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 3 |
| 2. 論文標題 ロシア資料と上代特殊仮名遣い | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 筑紫語学論叢 | 6. 最初と最後の頁 1-19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|---------------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 H30-4 |
| 2. 論文標題 日本語の長母音 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『国語と国文学』平成30年4月号 東京大学 | 6. 最初と最後の頁 pp.50-pp.68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 露語資料 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本語大辞典 | 6. 最初と最後の頁 p.983~986 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 28 |
| 2. 論文標題 「江戸時代ロシア漂流者の記録にみる嗜好品文化の研究」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『平成28年度 公益財団法人たばこ総合研究センター 助成研究報告』(公益財団法人たばこ総合研究センターTASC) | 6. 最初と最後の頁 104-135 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 95-4 |
| 2. 論文標題 古代日本語の長母音 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『国語と国文学』平成30年4月号 | 6. 最初と最後の頁 50-68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 駒走昭二 | 4. 巻 200 |
| 2. 論文標題 「レザノフ資料と方言史研究」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『人文研究』 | 6. 最初と最後の頁 75-101 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 駒走昭二 | 4. 巻 61 |
| 2. 論文標題 「漂流民ゴンザと日本語学：ゴンザ資料の日本語学的研究」 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 『ユーラシア研究』 | 6. 最初と最後の頁 52-54 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 久保園愛 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 「鹿児島方言におけるテンス・アスペクト・ムードの歴史」 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 『日本語文法史研究』 | 6. 最初と最後の頁 199-221 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 久保園愛 | 4. 巻 8 |
| 2. 論文標題 「ロシア資料の上付文字についての覚書」 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 『愛知県立大学日本文化学部論集』 | 6. 最初と最後の頁 89-105 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 久保園愛 | 4. 巻 130.131 |
| 2. 論文標題 鹿児島方言における格助詞ガ・ノの分布—近現代の談話とロシア資料を対象に | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『語文研究』130-131 | 6. 最初と最後の頁 1-17 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---------------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名 江口泰生 | 4. 巻 130.131 |
| 2. 論文標題 東国文献の開音・合音・ウ段音 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 『語文研究』130.131合併号 | 6. 最初と最後の頁 1-15 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計8件(うち招待講演 2件/うち国際学会 1件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 江口泰生 |
| 2. 発表標題 ロシア資料と日本語音韻 |
| 3. 学会等名 九州大学国語国文学会特別講演 九州大学伊都キャンパス イースト2号館D-105教室(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|-----------------------------------|
| 1. 発表者名 久保園愛 |
| 2. 発表標題 ロシア資料における格助詞 の機能 |
| 3. 学会等名 九州大学国語国文学会，九州大学伊都キャンパス |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 久保園愛 |
| 2. 発表標題 ロシア漂流民達の日本語を反映する『欽定全世界言語比較辞典』とその改訂版『アルファベット順全言語および方言比較辞典』の資料性の検討 |
| 3. 学会等名 国語語彙史研究会，神戸女子大学三宮キャンパス |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 久保園愛 |
| 2. 発表標題 鹿児島方言を反映するロシア資料における格助詞 (ヲ)の機能 |
| 3. 学会等名 九州大学国語国文学会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 江口泰生 |
| 2. 発表標題 8世紀奈良時代日本語の長母音 |
| 3. 学会等名 2017.7.22 岡山大学言語国語国文学会（文学部会議室） |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|-------------------------------------|
| 1. 発表者名 江口泰生 |
| 2. 発表標題 江戸時代ロシア漂流民の記録にみる嗜好品文化の研究 |
| 3. 学会等名 TASC研究助成報告会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 久保園愛 |
| 2. 発表標題 「ロシア資料の形容詞イ語尾・カ語尾をめぐって」 |
| 3. 学会等名 第77回中部日本・日本語研究会，於刈谷市産業振興センター |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 久保園愛 |
| 2. 発表標題 方言と中央語の対照 共通点と相違点 |
| 3. 学会等名 日本語学会（招待講演）（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|---|------------------|
| 1. 著者名 日本語学会 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 東京堂出版 | 5. 総ページ数 1223 |
| 3. 書名 平成30年10月 2018.10 『日本語学大辞典』日本語学会「露語資料」p.983～986、東京堂出版 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

国際共同研究の申し込みは快く受け入れてもらった。画像ファイルの料金の交渉まで進んだのだが、具体的に進める段階になって、話がスムーズに進まなくなった。論文を書いてもらおうという当方の申し出が向こうの意向に合わなかったのではないかと考えている。しかしこれに懲りず、コロナ禍が落ち着いたらさらに粘り強く交渉してみたいと考えている。

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|--|----|
| 研究分担者 | 駒走 昭二 (KOMABASHIRI Syouji) (40409917) | 神奈川大学・外国語学部・教授 (32702) | |
| 研究分担者 | 久保蘭 愛 (KUBOZONO Ai) (80706771) | 愛知県立大学・日本文化学部・准教授 (23901) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--------------------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 米重 文樹 (YONESHIGE Fumiki) | | |
| 研究協力者 | ワシリー シェブキン (VASILY SHCHEPKIN) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 | | | |
|---------|-----------------------|--|--|--|
| ロシア連邦 | サンクトペテルブルク東洋写本 研究所 | | | |